

<p>PSB (Process Safety Beacon) 2006年6月号 の内容に対応</p>	<p>SCE・Net の <b>安全談話室</b> (No.3) <a href="http://www.sce-net.jp/anzen.html">http://www.sce-net.jp/anzen.html</a></p>	<p>化学工学会 SCE・Net 安全研究会作成 (編集担当:長安敏夫)</p>
--	--	--

### 6月のテーマ:このバルブは開いている?…それとも閉まっている?

(PSB 翻訳担当:長安敏夫、山崎 博、小谷卓也(纏め))

司会: 本件の事故状況及び「あなたに何ができるか」の記事について、疑問点や類似事故防止のための提案がありますか?

UNO: バルブ1個での縁切りは危険を伴うことが多い。バルブの開閉表示は非常に大事ですが、縁切り部分をパージして危険を少なくし、仕切り板で縁切りして分離することも重要です。

KTN: 今でもこういうバルブが売られているのでしょうか?

WTB: 表示ミスはバルブ、機器取り付け時の圧テスト、漏れテストで発見した例がありました。

SBY: 統一の取れた仕組み、例外を作らないルールでシステムを作り上げ、且つそれを運転員に教育し徹底する事が重要です。「考えれば解るではないか」は禁物です。

NGY: 保全作業などで配管の開放端ができる場合、バルブ閉止だけに頼るのは危険であり、配管の開放端に閉止板を取り付けることが好ましい。

司会: オペレータがバルブの開閉状態を誤認して事故に繋がった事例を他にご存知ですか?

YMZ: スリーマイル島の原発事故は、炉心溶融という大事故になりました、弁の開閉状態の誤認が事故の発生と拡大に繋がった例です。初期段階で二次冷却水の主給水ポンプが停止し、代わりに補助給水ポンプが作動したが、開いているはずのポンプの出口弁が閉じられており給水できないのに気付かず、しかも、閉の状態でも緑のランプがつくようになっていた。また、一次冷却水の加圧器の蒸気を逃したあと、圧力逃し弁が閉じずに開いたまま固着していたが、表示ランプは閉を示していて誤認した。実は開閉を示すランプは指示命令を示すだけで実際の弁の開閉状態を示すものにはなっていなかった。これら弁の開閉の誤認が重なり事故を大きくしました。

#### 【談話室メンバー】

HOK: 日置 敬、IWM: 岩村孝雄、KBS: 小林浩之、KTN: 小谷卓也、MZG: 溝口忠一、NGY: 長安敏夫、NKG: 中川雅造、SBY: 渋谷 徹、UNO: 宇野 洋、WTB: 渡辺紘一、YMZ: 山崎 博、YOK: 山岡龍介